

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(39) 平成14年1月15日

藩校・寺子屋で使用された教科書(その4)

寺子屋と『実語教』・『童子教』(K179/61)

『実語教』は平安末期頃の選作とされ、仏教思想を主とし、仏教及び儒教の経典から文を選び、漢詩流の五言96句に構成したものです。鎌倉・室町・江戸の諸時代を通して広く庶民の間に読み伝えられていきました。

選者には弘法大師、護命僧正などの説がありますが、真偽は不明です。弘法大師(空海、774~835)は平安末期、天台宗開祖の最澄(767~822)と並び称される高僧で、真言宗の開祖です。また嵯峨天皇・橘逸勢とともに、三筆の一人とされています。もう一人の護命僧正(750~834)は、法相宗の高僧で、『研心章』など多くの著述を残しています。

「山高故不貴 以有樹為貴」(山高きが故に貴からず 樹有るを以って貴しと為す)で始まり、「智是萬代財 命終即隨行」(智は万代の財 命終われば即ち随って行く)等の言辞からも窺われるように、有形な財物に対し智を不朽の宝とし、智を獲得するために幼児から書を読み学に努めることを説いています。全編を通じて仏教的な色彩が色濃く出ていますが、「父母には朝夕に孝せよ 師君には昼夜に仕えよ」など、儒教的な要素も取り入れられています。これは鎌倉・室町期には悟りを開き、死後の至福を願う来世讃仰の仏教的な面が強く押し出されていた半面、江戸期になると、社会の安泰と幕府の文教政策に伴い、次第に儒教思想を基にした解釈が為されるようになったこと等によります。

『実語教』の普及・伝承をめぐる逸話は数多くありますが、古くは『平家物語』(13世紀中頃)の中に、南都の法師が比叡山の僧侶を実語教の文句をもじって罵倒した話などがあります。明治初期には福澤諭吉が『学問のすゝめ』の中で、実語教の「人不学無智 無智為愚人」(人学ばざれば智無し 智無きを愚人と為す)を引用して「実語教に、人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由て出来るものなり」と学ぶことの重要性を説いています。学問に励み一身の独立をすることが、ひいては国家の独立に繋がると、実語教を用い、西歐的学問の重要性に転換させています。

『童子教』は鎌倉末期に選編されたもので、選者は中国・唐の詩人、白居易(白楽天 772-846)、平安前期の天台宗の僧侶、安然(841-?)などの説がありますが、不詳です。「入郷而隨郷」(郷に入りては郷に隨え)「人死而留名 虎死而留皮」(人は死して名を留め、虎は死して皮を留む)等、今日ある格言の多くが童子教により伝えられています。実語教と同様に、仏教思想を基にしたながら、仏教および儒教の経典から文を選び、五言330句に編纂・構成したものです。行儀作法、言行の戒め、子弟のあり方、父母への孝養などを説いています。

江戸時代になり、『実語教』と『童子教』は併せて刊行されることが多くなり、特に後期になると寺子屋の増加や、庶民の家庭における文字教育が普及したことにより、読本としての種々の『実語教』『童子教』が刊行されるようになりました。特に総ふりがな付き・絵入り等が多く出現し、二教合本は慣行例となっていました。当館所蔵の資料も全て『実語教』『童子教』合本で、文化12(1815)年刊行本(370/40)、天保5(1834)年(K179/61)の刊行本(ふりがな付き)、安政7(1860)年刊行本(370/161-2)等の所蔵があります。

『実語教』『童子教』は、五字を1句とし、韻を踏みつつ重ねて行く形式をとっていますが、これは、子供が口に唱えて覚えやすい長所を持ち、言葉は時を経て現在に至るまで、日常生活の中に知らずに溶け込んでいます。修身書としての『実語教』『童子教』は単なる無味乾燥な教科書に留まらず、文学・詩・思想の要素等を盛り込み、幼少から年長者に至るまで生涯に渡って興味が持たれ、各時代の人格形成に貢献する書であったがために、数百年にも渡り、形式・内容を変化させつつも存続してきた優れた書であり続けた訳です。

【参考文献】

『日本哲学思想全書』16 修養篇(121.08/105)

『日本教科書大系』(375.9/118)